フィラデルフィア巡礼

坂根義範

小中学生だった十代の頃、自分が三十歳になる日が来るなどということは、到底、想像できないことであった。

世紀末、つまり、二十世紀が終わるとき、この世界も終わることになると思っていたので、自分は、三十歳を迎える前に消えてしまうのだろうと漠然と考えていた。

ただ、子供の頃の一日というのは、歳を重ねた今より途方もなく長く感じられるものだったので、その後一〇年以上も先のことなど、とてつもなく遠い未来にしか感じられなかった。だから、三十歳の自分というものは、現実味のある対象として関心を持てるものではなかった、と言う方が正確かもしれない。

年齢の計算上、二十世紀最後の年である二〇〇〇年には二九歳となり、したがって、二十一世紀最初の年である二〇〇一年には満三〇歳を迎えるはずであった。

当時の僕ら小中学生の間で流行っていたものは色々あるが、そのうちの一つに、「ノストラダムスの大予言」というものがあった。同名のシリーズ化された新書版大の本がよく売れていたように記憶している。

国内外でちょっとした自然現象や災害が起きる度に、「あれはノストラダムスの予言に書かれていたことだ」とか「ノストラダムスの予言が当たった」などと言われていた。富士山の噴火についても、ノストラダムスの予言に結びつけて語られていたように思う。

生きる目的を明確に持っているわけでもないのに、この先何十年も生き続けるものだと信じて疑わなかった少年たちは、そのような予言の的中によって自己の生に終止符が打たれてしまうかもしれないということを恐れ、

本能的にそれを回避しようと願い、その方法を探るため、ノストラダムスの予言に惹かれていったのだと思う。

十六世紀のフランス宮廷で侍医をしていたこの占星術師が、私と同じ世代の若者たちに与えた影響は、あまり馬鹿にできないものがある。彼の残した曖昧で、それ故に不可解な予言詩の数々は、二〇世紀の日本で独自の解釈が加えられ、多くの若者をとりこにしたのである。

先日、大学生向けの書評誌を読んでいたところ、作家の伊坂幸太郎氏が「……ノストラダムスの大予言もあったりして、三〇歳で人生が終わってしまう、と思いながら生きてきたので、ベースが悲観的なんですよ。」（対談「どんなことにも、意味がある」、季刊『読書のいずみ』一二五号・二〇一〇年一二月号、一二頁、全国大学生活協同組合連合会）と述べているのを目にして、激しく同感してしまった。彼は、私と同じ年の生まれである。

しかし、世紀末である二〇〇〇年は呆気なく訪れ、そして、過ぎ去り、新しく二十一世紀が始まった。

二〇〇〇年を迎える際、Ｙ２Ｋと呼ばれるコンピュータ障害が発生するのではないかということがしきりに言われたぐらいで、他には、何も恐ろしげなことは起こらなかった。

当時の私は、社会人になって数年経った頃だったので、日々の仕事に追われるだけの毎日であり、ノストラダムスの予言より、上司の一言一言に左右される生活を送っていた。

二十一世紀が始まって半年余りが経ったある日、宇都宮にある職場で仕事をしていると、隣室にいた同期の同僚が、

「アメリカでテロが起こったみたいだよ。テレビつけてごらんよ」

と言ってきた。

当時、まだブラウン管であったテレビに映ったのは、煙を上げるペンタゴン（米国国防総省）だったように記憶している。

私の実兄がニューヨークに駐在していることを知っていた同僚が心配して声をかけてくれたのであった。

このときつけたテレビで、世界貿易センタービルが崩れ落ちる映像なども目にしたが、まあ、大丈夫だろうと根拠もなく思っていた。一応、念のためという思いから、東京で暮らしている親に電話してみたところ、ニューヨークにいる兄とは連絡がとれないという。世界中から問い合わせが殺到しているためか、電話回線も混

み合っているようだ。
当時まだ存命だった父は、
「もし、死んでしまっているなら、それ以上どうしようもないし、生きていれば、後でまた会えるのだから、それでいい。今、慌てて現場に駆け付ける必要はないぞ。こんなときに一族郎党を引き連れて行く馬鹿な奴がいるが、現場にいる人間にとっては、いい迷惑だ。周りの者は、黙って見守っていればいいんだ。」
と語っていたので、とりあえず放っておくことにした。以前から、うちの家族は、こんな感じであった。

ところが、兄の安否は、意外なルートから知ることができた。
テロの惨事を報じる新聞を開くと、社会面に次のような記事が載っていた。

マンハッタンの金融会社に勤める坂根直統さん（三二）（東京都港区出身）は、通勤途中にテロに遭遇した。いったんオフィスに出勤したものの、避難命令が出されたため、帰宅。マンハッタン島から出ることを禁じられているため、同僚一人も坂根さん宅に待機しているという。読売新聞の国際電話に対し坂根さんは、「地下鉄は運休し、道路には消防車やパトカー、避難する人たちの車で大渋滞が起きている。ビルの五十二階にあるオフィスのビルから、世界貿易センタービルを見ると、立ち上る煙で覆われていた。貿易センタービル周辺の金融街は完全封鎖され、高層ビルは同様のテロへの警戒から、建物の外へ出るように指示が出された」と、声を上ずらせた。（讀賣新聞縮刷版平成十三年九月号六五三頁）

後日、兄に確認したところ、確かに、新聞記者にそのように語ったらしいが、「別に声を上ずらせてなんかいないよ。ブン屋は、テキトーに話を作るからな」ということだった。

双塔の超高層ビルが崩壊するシーンはショッキングであったが、それ以上に、私にとって衝撃的だったのは、そのような破壊的な攻撃を受けるほどにアメリカ合衆国が憎しみの対象になっていたということであった。

もともと、大学は史学科への進学を希望していたものの、浪人した末に法学部へ進んだ私は、あまり興味を持てないまま法律学を学び始めた。どうやら法律家への適性は薄いようだから、役人になるか企業にでも就職しようか思い始めた頃、単なる海外への憧れからとった「英

米法概論」という講義で、初めて「法の支配」というものの神髄を垣間見た気がした。
その講義は、一年間、ひたすらアメリカ合衆国憲法の成り立ちや憲法訴訟に関する判例を読み解くものであった。
非常に面白かった。吸い込まれていった。
担当する助教授の語り口は、木訥としたもので、軽妙洒脱なものではなかったが、彼が用意してくれたレジュメは分かりやく、すぐに週一回の講義が楽しみになった。
実際に合衆国憲法の判例を学んでみて意外であったのは、なんとも些細と思えるような出来事や揚げ足とりではないかと思えるような瑣末な事柄についての訴訟に関して、当事者双方が真剣に主張を闘わせ、立証を尽くしていることであった。
そして、一つ一つの判例の事案が人間臭いものであり、最高裁判事たちの発する言葉が胸に刻みこまれるものであった。
相当長い間、大して上達しないまま英語を学び続けていたが、このときほど、英語を勉強しておいてよかったと思ったことはなかった。

例えば、十九世紀末に黒人差別を許容する制度に合憲の判断を下したプレッシー事件判決（一八九六年）の多数意見に対し、反対意見を書いたジョン＝マーシャル＝ハーラン判事（Justice John Marshall Harlan）が述べた、
「我々の憲法は、色盲である。」
という表現にしびれてしまった。
ネガティブに思われがちな言葉を憲法の基本原則を簡潔に言い表すフレーズに用い、肌の色で人を区別しないことを過不足なく表現してしまう巧みなレトリック。
……しかし、憲法上の観点、法的視点から見ると、この国には、優位に立ついかなる支配階級も存在しない。ここにはカースト制度はないのである。我々の憲法は色盲であり、市民の間に階級を認めないし、また許容しない。公民権に関して、すべての市民は、法の下に等しいのである。（……But in view of Constituion. in the eye of the law, there is in this country no sperior. dominant, ruling class of citizens. there is no caste here. Our Constituion is color-blind. and neither knows nor tolerats classes among citizens. In respect of civil right, all citizens are equal before the law.）

奴隷解放宣言がなされたにもかかわらず、その後も長

年、合衆国最高裁判所は、「分離すれども平等（separate but equal）」政策を合憲・合法と認めていた。
一九五四年のブラウン判決において、最高裁が自らこれを違憲として否定するまで、白人と黒人を分離した上での平等を認める政策が許容されており、公立学校において白人と黒人を別々に教育することや、鉄道の座席を人種で区別する法律は、憲法で保障されている平等保護に反しないとされていたのである。
エイブラハム＝リンカーン大統領による一八六三年の奴隷解放宣言から、黒人による大統領の就任宣誓を聞くまで、約一五〇年の歳月を要したのであった。

「アメリカの宗教は、憲法だ。アメリカは、憲法教の国だ。」

と言われることがあるが、私は、すっかり、この憲法教にはまってしまったことになる。異国の憲法を学んだお陰で、日本で法律家への道を志すことになった。まあ、日本国憲法は、合衆国憲法の多くを継受しており、合衆国は、我が国の母法国の一つであるのだから、それほどおかしなことではあるまい。
また、ブラウン判決やその執行のために文字通り血の滲む努力を続けてきた歴史は、黒人のバラク＝フセイン＝オバマ大統領が登場した現在でも、いまだ現在進行形であるが、憲法の理念を実践しようとする気力や、そのための議論を少しも惜しもうとしない姿など、まだまだ見習う点が多く残された国であると思う。
このように、自分のアイデンティティーの一部は、合衆国憲法にあると思い込むようになっていただけに、九・一一の出来事は、私にとっては、横っ面を張り倒されたようなものであった。
自己の信仰を揺るがせられた者は、どのような行動に出るのだろうか。
信仰を捨てる者もいるだろう。
他の教えにすがったり、改宗したりするかもしれない。
ただ、多くの者は、いま一度、信仰の拠り所を確かめ、自己の信仰がそれでも揺るぎないものであることを確かめようとするのではないだろうか。
史学科志望であった男は、合衆国憲法のルーツを辿ることによって、信仰の再確認をしようと考えたのだと思う。
それが、私にとってのフィラデルフィア巡礼の意味であった。

フィラデルフィアは、合衆国独立以前の英国植民地時代からクエーカー教徒らによって開拓された土地であり、当時、ロンドンに次ぐ大英帝国第二の都市であったようである。その後、この地で独立宣言が採択され、連邦憲法案が起草され、第一回連邦議会が召集されるなど、合衆国草創期の政治的な中心であり、ワシントンが建都される前の十年間は、合衆国の首都でもあった。
現在も、人口は、全米で四位か五位のはずである。
同時多発テロから一年余り経った二〇〇二年の暮れ、成田からデトロイト経由でニューヨークのジョン・F・ケネディ空港に降り立った。
左隣の座席に座った七〇歳のフィリピン人は、ワシントンDCに娘が住んでおり、自身もグリーンカード（永住許可証）を持っていると話しかけてきた。
私が三十一歳で独身だというと、

「ベリーナイス！」

を連発していた。
デトロイトでの入国審査・トランジットの際、空港の身体検査で初めて靴まで脱がせられるという体験をした。
もちろん、ジャケットも脱ぐようにと指示され、ポケットの中身は全部出させられた。
いまだニューヨーク駐在中であった兄の住まいに泊まりながら、まずは、年末のニューヨークの街を歩いた。テロ発生から一年以上が経ち、アフガニスタンのタリバン政権を倒した後であったせいか、ニューヨークの街は、既に落ち着きを取り戻していた。ブロードウェイでは連日連夜ミュージカルが上演されており、クリスマス直後の通りは、光で溢れていた。
ただ、グラウンドゼロと呼ばれる世界貿易センタービル跡地は、崩落したビルのがれきが取り除かれ、大きな穴ぼこになったままであった。
それから二、三日して迎えた大晦日、ニューヨークから一人で鈍行列車を乗り継いで南西に向かい、フィラデルフィアを訪れた。二〇ドル弱でアムトラックのチケットを買い、二時間余り車中で揺られた。
途中、車内で、通路を隔てたボックス席で寝ころぶ若い白人女性がおり、行儀の悪い奴だと思いながら横目で見ていたところ、いきなりガバッと起き上がり、携帯電話で話しだした。どうやら目的の駅で降り損ねたらしく、電話を切ると、私に、

「次の電車は何時？」

などと尋ねてくる。明らかに東洋人顔の私をこの辺りに

暮らす人間だと思っているらしい。ああ、これが、人種の坩堝（るつぼ）ということの一断面なのだな思いながら、
「俺は、この辺り、不案内なんだ」
と答えた。

降り立った駅からぶらぶら歩き、まず、フィラデルフィアのシティ・ホール（市庁舎）を訪ねる。

この建物は、一六六メートルの古い尖塔（タワー）を持っている。これに上りたくなった。予約が必要だとは知らずに、内部の観光案内所で係員のおばさんに、
「タワーに上ってみたいのだけど」
と尋ねると、とても丁寧に応対してくれた。直近のツアーの予約人数をすぐに電話で確認し、約一五分後のツアーに参加できるように手配して、チケットを手渡してくれた。こういうのをホスピタリティーというのだろうと思った。聞き取りやすい発音でゆっくり話す英語も有り難かった。

タワーのてっぺんには、この地のパイオニアで、ペンシルヴァニアという州名の語源にもなっているウィリアム＝ペンの銅像が立っている。その真下の展望室まで上がり、フィラデルフィアの市街地をぐるりと眺めた後、いよいよ、目的のインディペンダンス国立公園へ向かって歩き出した。

街の広場ではニューイヤー・コンサートの準備をしており、ステージの設営や大型スピーカーのセッティングをしていた。

インディペンダンス・ホール（独立記念館）を中心にアメリカ独立期の歴史的建造物が建つエリアが、インディペンダンス国立公園となっている。

私が訪れた年に竣工したばかりの観光案内所に入り、公園内の歴史的建造物に入るための無料チケットを手に入れる。

インディペンダンス・ホール（独立記念館）は、それほど大きくない建物であったが、ここに建国の父たちが集っていたのだと思うと、何とも言えない思いが込み上げてくる。隣に建っているコングレス・ホール（国会議事堂）は、フィラデルフィアが合衆国の首都であった時代の建物である。これらの議場に、ジョージ＝ワシントンやベンジャミン＝フランクリン、トマス＝ジェファソンらが実際に集っていたのかと思うと、感慨深いものがある。合衆国の立ち上げという壮大なドラマは、ここから始まったのである。

独立宣言の際に高らかに打ち鳴らされたというリバティ・ベル（自由の鐘）は、亀裂が入っているため、イ

ンディペンダンス・ホール前のガラス張りの建物の中に安置されていた。観光客がひっきりなしに訪れ、何分かおきにガイドが解説している。さしずめ、聖遺物といったところだろうか。

日本の関東地方と同様、フィラデルフィアの冬は、乾いた空気と暑がりの私にとって心地よい寒さの季節であった。

そして、この日は、穏やかで、それでいて胸が高鳴り続けた冬の一日であった。

やはり、訪れてよかったと思った。

自分のペースがどこにあるのか、どこに置くべきなのかを再確認することができた。

時空のうち、同じ時間を建国の父らと共有することはかなわないが、彼らが身を置いた空間を共有することで、肌感覚のようなものを共有できた気になり、彼らに少しでも近づけたような気持ちにさせられる。

多くの者にとって、巡礼の旅というのは、こういった作業をするためのものなのではないだろうか。

ニューヨークに戻り、よく晴れた日に、マンハッタンの南の方をぶらぶら歩いてみた。どこへ行っても観光客が多く、ここで暮らす人たちもそれぞれのペースで行き交っている。

凱旋門のような小振りな石造りのモニュメントがあるワシントン・スクエアで少し休憩した後、ニューヨーク大学の前を歩いていると、品のよい初老の女性から道を尋ねられた。シックなツーピースを着て、片手にハンドバッグを持ちながら、小首をかしげている彼女を見返した際、細い金色フレームの眼鏡の奥に、瞳の清らかさを認めることができた。

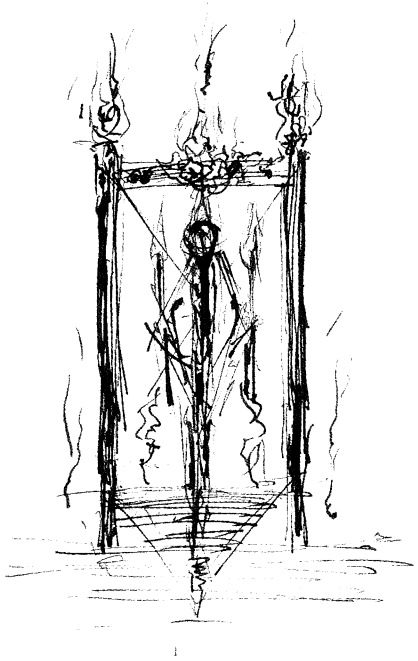
短い旅の間に地元民によく間違われるものだと内心苦笑いしながら、この辺りは不案内なのだと詫びると、少しだけ驚いた表情を見せた後、彼女も丁寧に詫びてきた。

彼女がアメリカ人かどうかは分からないが、東洋系の冴えない労務者風の男に向かって礼儀正しい英語を使う彼女を見ながら、合衆国というのは、こういう人たちが集う国なのだと思った。

それから十年近くが経ち、世界及び日本の様相は大きく変わってしまったが、巡礼の賜物か、信仰は変わらずに保たれている。

文人

第 54 号



The Literati No.54 2011